

第二回留学報告書

明石晃一

1. 学習

今学期 (Candlemas Semester) の履修科目は、(1) Human Biology (2) Medical Ethics (3) Organic and Biological Chemistry の三つでした。前学期の反省を活かし、前より少し本を読む量を増やすことを意識し、学習においても計画性を重視し効果的に大学の勉強に励むことが出来たと思います。

(1) の Human Biology では、文字通り人体に関連する生理学、病理についての一通りのテーマを浅く広く学びました。この中では、学期中間頃の期限でプレゼンとエッセイの課題が出されており、前者のテーマは各自に割り当てられ、私は「心筋梗塞」が指定されました。こちらは、同時期に読んでいた“Heart” (Johannes Hinrich von Borstel) の内容とちょうど内容が重なり、他複数の論文を渉猟し我ながら悪くないものを作ることが出来たと思います。後者については、テーマは大枠のトピック (循環器系、内分泌系、消化器系) から各自一つを選択し議論を深めるという形で、私は内分泌系をチョイスし「I型糖尿病が尿生成メカニズムに与える影響」について論じました。こちらについても、“Hormones” (Martin Luck) を合わせて読んでいたので、すっきりした構造でエッセイを組み立てることが出来たと感じました。最終試験は、英国国内の感染症拡大の影響に鑑みオーブンブック形式で行われましたが、十分に力を発揮することが出来たと考えています。前学期の生物のモジュールでは、植物や昆虫など生物学全体にフォーカスが置かれていた為、あまり集中出来ずにいましたが、今学期の内容はどれも「医学らしい」内容で、強い興味とともに積極的に学習に励んだと思います。

(2) の Medical Ethics では、学期前半は Multiple Mini Interviews (MMI) の対策、後半は通常通り医学倫理における各テーマについての講義と議論が行われました。MMI については以前寄稿させて頂いた「留学先決定に至るまでの経緯」においても簡単に記述致しましたが、General Medical Council の定めるところに従い、大学が独自に口頭試問形式で医学倫理に関連する問題を複数出題するものになります。内容は、医学倫理のみに限らず、自身が何故医学を学ぶことを志すのかということが多角的な視点で問われる為、私の場合は過去に参加した日本-スペインの音楽交流事業における手話合唱への参加とその意義について改めて考察をしたり、医学の歴史そのものについて関連書籍 (“History of Medicine” (William Bynum)) に目を通したり、直接的に医学倫理への理解を深める勉強をしたり (“Ethics in the real world” (Peter Singer), “Medical Ethics” (Michael Dunn & Tony Hope)) するなど、多方面の書籍を読み準備を行いました。結果、二月中旬に行われた MMI は無事に合格致しました。そののちは、人工中絶や安楽死、遺伝子操作を扱う講義及び議論にシフトし、

これらの問題について更に理解を深めることが出来たと思います。また別のプレゼンの課題については、自由テーマであったので、ちょうど読んでいた“Dyslexia” (Margaret Snowling) をそのままトピックにしてしまおうと思い、失読症の病理や社会的な側面から見た倫理的な問題 (診断の線引き、医療資源をどの点まで割りうるか) について論じました。

(3) の Organic and Biological Chemistry では、有機化学と生化学についてのイントロダクションが行われました。こちらについては、将来的に医学の分野にいかほど役に立つものなのかは現時点では判断しかねたものの、個人的にただ面白いと思っていたので、精力的に内容を学びました。実験では、講義で学んだ付加反応、脱離反応、置換反応の詳細な反応機構の知識と核磁気共鳴法や赤外分光法の知識を合わせた、水素化金属を触媒に用いたカルボニル化合物の還元反応による同定を行いました。やっていることはパズルのようでとても興味深かったです。本モジュールで学んだことは、将来薬理の勉強をする時にも役立つかもしれませんし、またせつかくこういった勉強をする機会があったので、今ストックの中にある毒物関連の本をのちほど読むのもとても楽しみになりました。

2. 生活

相変わらずのセントアンドリュースの美しい街並みは、見飽きることはありません。一学期と特に生活は変わらず、ピアノを弾いてジムに行つて、カフェで読書をして暖かい日は大学の教会前の芝生で寝っ転がる (右図、St Salvator's Quad にて) という落ち着いた生活を送っております。

加えて、こちらでの生活が一年弱になり、スコットランドの英語にようやく耳が慣れてきました。人によってアクセントの強さはスペクトラムですが、カフェの店員さんやちよいちよい一緒に喋る他のお客さんの言っていることは大抵わかるようになってきました。一方私が話すアクセントについては影響もなく、前述のプレゼンでも「実に素晴らしい RP だ」と高く評価して頂けたのが嬉しかったです。



3. 課外活動

所属していた Computing Society の中で、正式に Competitive Programming Subcommittee のメンバーとなり、更には四月に行われた総会選挙にて、Competition Organiser の役職に選任されました。問題作成や大会運営など、以前から非常に興味があったので、責任をもって執行部としての職務を全うしたいと考えております。



Like Comment Share



Like Comment Share



また三月には、ヨーロッパ全土の大学チームが出場するヒューリスティックコンテスト "Reply Coding Challenge" が開催され、同ソサエティのメンバーでコンピューターサイエンスを専攻している一年生の友人二人と出場しました。四時間のコンテストで、「勇者が複数のモンスターを倒す」というゲームっぽい内容の戦略の最適化がテーマでした。序盤の三時間ほどは延々とチームで詰まっていたのですが、途中一人のメンバーが特定のテストケースで、計算量の意識はしていないものの精密なアルゴリズムを構築し得点をあげ、その後私が精度は低いものの計算コストが低い統計学の知識を用いた手法を導入し全テストケースでそここの点をあげました。またその途中、ファイルに実行結果を移す作業に時間がかかっていたところ、もう一人のメンバーが学部で学んだのでであろう手慣れたディレクトリー操作を行い(何をやってたのか私には理解し兼ねましたが)、直ぐに結果を提出出来るようにするのを手伝ってくれました。全員が理想的な形で協力し合うことが出来、結果も全2800チーム中400位ほどまでは入り込み、良くは決してないもののこのチームでのファーストトライとしては悪くもない

結果を残せたと思います。